

---

# 愛すべき妻とアレの間に

無一物無一文

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛すべき妻とアレの間で

### 【Nコード】

N0326BA

### 【作者名】

無一物無一文

### 【あらすじ】

私には愛すべき存在がふたつある。ひとつは妻。そしてもうひとつはアレである。

それはある日、突然起こった。

目が覚めた私は下半身がすーすーすると思い目をやると、ズボンが脱げていることに気がついた。なぜ脱げているのだろう。寝相が悪かったのだろうか。それとも、無意識の内に脱いってしまったのか。何も分からぬまま、ズボンを探そうとキョロキョロしている内にふと目についてしまった。

ないのだ。

私が何よりも大切に育てに育てた黄金に輝くアレが。いついかなる時でさえ気につけ、丁寧に保護し続けていたアレが。綺麗さっぱり、ツルツルに無くなっていた。

「何処だ!？」

布団をひっくり返し、そこら中を手当たり次第探りに探る。ない。ない。ない。一本もない。あんなに優雅に轟々しくそそり立っていたアレがない。

「あああああああああああああ」

考えられないことだ。確かにアレは存在したのだ。昨日の寝る直前までは。丁寧にクリームを塗って、優しく撫で撫でと可愛がってからお休みしたのだ。

それが、ない、だと……。

どういうことだ。自慢のアレがなぜ見当たらないのだ。

「それはね」

突然の声。振り向く私が見たのは愛すべき妻の笑顔だった。

「おお、愛すべき妻よ聞いておくれ。アレがないのだ。私の何よりも大切にしていたアレが」

「それはそうよ。だってアレは私が懇切丁寧に一剃り一剃りすべて刈り取ったのだから」

「なん……だと……」

信じられない発言だった。まさか愛すべき我が妻が、そのような残忍な仕打ちを行うなど気でも狂ったのか。

「な、なぜだ、なぜ、そ、そんなことをしたのだ」

狼狽える私に妻はこう言った。

「だってあなた、毎日毎日、アレのことばかり考えて私にちつとも構ってくれないのですもの」

「なっ、そんなことで」

「そんなこと？ あなたにとってはそんなことでも私にとっては重要なことだわ」

「なにが重要なことだ。私にとってはアレこそ重要なことだ――」

「そんなだから、そんなだから私はアレを剃ったのよ――」

構わなかったぐらいでアレを剃ってしまうとはなんて非情な妻なのだろう。怒りが沸々と込み上げてくる。許せるものではない。アレはなによりも大事なモノなのだ。一度剃ってしまったては同じアレは二度と生えてこないかもしれないほどレアなアレなのだ。

「お前はなにをやったのかわかっているのか？ これは命をかけるほど重大なことなのだぞ」

「何よ――！ アレを剃られたぐらいでギャーギャーと。そんなにアレが大事なの。私というものがあひながら、そんなにアレを愛でないといけないの。私はなんなの？ 何のためにあなたの妻になったの？ 私悔しい。あなたが毎日毎日アレばかり愛する姿を見せられるのが悔しい。私だって愛されたいの。何よりもあなたに愛されたいの――」

「なん……だと……」

私にとってアレはなによりも大切なモノだが、まさかそのことで愛する妻に寂しい思いをさせていたとは知らなかった。

ここは一言、妻に愛してると言ってやればすべては解決するはずである。

だが待つてほしい。

事態はそう簡単に解決しない。

私にとってアレは何物にも代えられない唯一無二のものであり、果たして妻とアレ、どちらをより愛しているのかと問われれば、私は思考の埒埒に迷い込んでしまうような出口の見つからぬ世界を延々と彷徨い続けることになってしまふのだ。

どうすればよいのだろう。

アレよりも妻を愛していると今すぐ言うべきか？

だが、それは嘘にならないだろうか。別に私は自分を絶対の正義の使徒などとは思っていないので、必要とあれば嘘だつてついてみせることは出来る。しかしだ。相手は愛する妻なのだ。愛する者に仮初の言葉で何かを誤魔化すというのは、ひどい裏切りなのではなからうか。そしてそれは、アレに対しても失礼極まりないことだと思う。

嘘をつくことは簡単だ。人生において嘘とは物事を解決するために許される場合もあるのだ。その嘘を今つけば、事態は即座に収拾するだろう。だがそれでいいのか？

アレと妻、どちらが大切に決めかねている現状、そう安易に物事を片付けようとしていいのか？

いいとは思えない。

なら、どうすべきか。

私は悩んだ挙句、その答えを妻に告げた。

「仕方ない、離婚しよう」

「え？」

「すまない。お前のことは確かに愛してる。それは間違いない。だが、私は同時にアレも愛してやまないのだ。どちらかを選ぶことなどできない。そしてそんな気持ちのままでお前と夫婦で在り続けることなど出来ないんだと今気づいた」

「そ、そんなあなた」

「すまない。私にとってもこれは悲しくも苦しい選択だが、こんな状態では別れるしかないと思う」

「嫌よ！！ そんな、アレが原因で離婚だなんて！！」

「すまない。どちらか選べない以上、それしか道はない」

こうして、私は妻と別れる決意をし、ただ今離婚調停中である。  
愛する妻を失ったことは悲しいが、その代わり、新たにすすくと伸びてきたアレ、スネ毛が私の傷ついた心を癒してくれてると考えると、これからの人生も頑張ろうという気になるのである。

（後書き）

好きなものがふたつあって、どちらか一方を迫られるとどちらを選ぶか悩むものです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0326ba/>

---

愛すべき妻とアレの間で

2011年12月31日20時54分発行